

昭和二十六年十一月十五日發行（毎月一回・十五日發行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

（通第三十二号）

慈

光

第三卷 第十一號

目

次

聖語集	 (1)
信仰と生活	 (2)
聖親鸞を語る	 (7)
念佛のたのもしさ	 (12)
眞実	 (13)
花田正夫	
福島政雄	
松本解雄	
出淵勝郎	

聖語集

如來を見ざる者の苦惱

父母も兄弟も、能く救済する者無く、無限の荒れ野の道なきに迷ひ、水も無く、樹蔭もなく、人影さへなく、たゞひとり苦を受く。彼れこの諸々の苦惱を受くるは、如來を見たてまつらざるに由る。 僧伽叱經。

佛まします家

善男子、若し衆生ありて、佛は常住にして変異したまはずと謂はば、まさに知るべし、是の家に則ち佛ましますと爲す。 涅槃經。

聖賢に事ふる愚者

愚人の生涯を尽して、明智の人に承事しつつも、その眞法を知らざることを、杓子のつねに食物を扱ひつつもその味を知らぬ如し、 法集經。

一切の男女は我が父母なり

衆生の輪廻して六道に生ずること、猶ほ車輪の終始なきが如く、或は父母となり、男女となり、世々生々に互に恩あり。父母を見るが如く等しくして差なきも、聖智をさとらざれば識るに由なし。

一切の男子は皆これ父、一切の女人は皆これ母なり、如何ぞ未だ前世の恩を報ぜずして、かへつて異念を生じて怨嫉を成さん。 心地觀經。

道あれば大平を致す

たとへば牛の行くに其の道直く正しければ、餘の牛皆従ふが如し。尊貴道あり、下をひきゐるに正を以てし、遠近のひと化に潤へば、則ち大平を致す。 寺經抄。

明師にあはざれば大道あるを知らず

譬へば四種の鼠の如し、一は屋中の鼠、二は野田の鼠、三は家中の鼠、四は泥鼠なり、屋間の鼠は平地に居る熊はず平地の鼠は屋間に居る能はず、野田中の鼠は人家に居る能はず、泥中の鼠は泥沼を出づる能はず、倉中の穀滿つるを知らざればなり。

人にまた四輩あり、一は瑞身正意にして戒を持して犯さず、阿羅漢道を求む。二は持戒精進にして独覺を求む。三は持戒學問して經に通じ智を磨きて一切を度せんと念じて佛道を求む。四は佛弟子とは名のみにして破戒し、學問に精進せず心は油断多く、苦しみ滋し、學問して明師にあはすんば、なんぞ大道あるを知らんや、船に乗りて池水泉流に遊ぶもなんぞ天下に大海あるを知らんや。佛法はけに大海なり。 恒水經。

信仰と生活

花田正夫

總ての宗教は信心を一番大切な生命としてゐるが、同じく信心と呼んでゐてもその内容は千差万別である。私はここに大別して、自力の信心と他力の信心とする。世間には半他力半自力の信心も存在するといふが、それは皆自力の信心におさめられるべきものと信ずる。

自力の信心

さて自力の信心とは、自己の力を認め、それを土台として作り上げた信心である、その濃淡、厚薄は各人各様で、種々様々である。私はこの自己の力を智慧と感情と意志の三つに分けて、その上に成り立つてゐる信仰心を述べて見よう。然し人間の生活は心理学者の言ふやうに判然と分けられるものではない。唯主な動きを擲へて以上の三つに仮りに分類するにすぎない。

第一に智慧とか理性とかいふものを土台とした信仰で昔から合理的信仰と呼ばれるのがこれに屬する。然しこの難点は元來人間は有限な者である、だから有限の智によつてうなづけるものは極く僅かである。ここに智識欲に燃えてゐる間こそ合理的宗教といふものが魅力をもつが、年齢と共に夢の如く消えて色あせて行く。アウグスチン等も青年期の一時期は

合理的信仰をしきりに提唱してゐたが現実の生活に直面しては雲霧の如く消え去つてゐる。

第二は意志の力を土台とした信仰で、修養的信仰である、我々は皆善くなりたい心を持つ、そこに善をたすけ、惡をこらしめる信仰の対象を求めて来る。この信仰は自己が善くなるのが中心であるから、何時も何か善を爲し、或は將來に善を爲し得るといふものがなければならぬ、これが無いと自分の立つ瀬はなくなるのである。

然し自分が善をしてゐるとか、出来るであらうと思ふことが、すでに慢心であり独善であり邪見である。我れ是とする時、他を非とするのは当然の結果である。これでは我他彼此の修羅場以外には行方何の光もない。眞の善、絶対善は善を行ひつつ善を爲すといふ思ひが空ぜられてゐなければならぬ。然しさうした善は実行不可能といふ問題に行き詰る、即ちどんなに漢擲いて見ても相對五分五分の善、虚假の善、偽りの善を脱することが出来ないで、万人血の涙を流すのである。

そこに眞の善を求めつつ常に自分は惡人であり偽善しか出来ないことが知れて、ここに善人を擁め惡人を捨てるといふ

信仰は破綻してしまふのである。

更に眞の善とは何かといふことになる、自己中心の不確かな判断しか爲し得ぬ身の愚さに沈む外はない

第三の感情的信仰に就いて見るに、感情は理性でない、盲目的である。美しいとか好きであるといふところには理屈はない。そして私共の生活の過半はこの盲動的な感情で動いてゐる、善悪是非を考へてやるのは極く僅かである。ほしいから食べる、好きだから遊ぶといった風なことが殆んどである。この私共の生活の過半を支配する感情で、一番いやなのが死であり病であり禍である。即ち暗さといふものが堪へ難い生活の恐怖となる。だから明るく楽しく喜ばしい方向に常に感情は向ふ。然し現実の生活はこれを常に破ることが多い。そこに樂を與へ喜びを與へ、苦を除き、暗さを払つてくれるもの、さう言ふものに盲目的にしがみつくのである。近代科学の範とも言ふべき大病院でも、四病棟とか九病室といふものを除き、各地には厄除けといふことが行はれて吉凶禍福を祈るといふ風なことが人々をひきつけるのである。

然しこの感情を淨化して所謂絶対帰依の感情といふやうな信仰も説かれてゐるが、いづれにしても自己の持つ感情を中心にしてゐることには違ひない、ところが感情は氣まぐれなもので常に浮動してやまぬ、さりとて抜き去り難いしつこさを持つので、迷信の除き難い原因もそこにあり、またいかがはしい宗教が流行する淵源にもなるのである

かく感情的信仰は全く盲目的である、非常に危険であり

太子は勝鬘經の「如来に調伏せられて、如来に帰依し、法の津沢を得て信樂の心を生ず」といふことを大切に勧めて下されてゐる。調とは、ととのへる、やはらげる、したがふ、おさめる、かなふ、といふ意味である。伏とは、ふす、したがふ、といふ意味である。佛の慈悲と智慧の御力によつて、ととのへられ、やはらけられ、かなはしめられ、やがて、したがひふす身として下さる、それが佛に帰依せしめられる根源であるとのことである。又帰依せしめられるから、常に御法を聞き、御法に潤はふやうになり自然に信樂の心も生ずるのである。

親鸞聖人は「夫れ信樂を獲得することは、如来選択の願心より發起す」と申され、和讃にも「釈迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、我等が無上の信心を、發起せしめ給ふなり」と讃仰されてゐる。釈迦彌陀二尊を慈悲の父母としたまはる無上の信心である。即ち佛の廣大無辺な清淨眞実無碍のおまことが我等の上に徹した相をそのまま大信心と申すのである。信心といふものを別に我等が作りあげて、その力で彌陀佛にたすけられるのではない、彌陀佛の老少善惡のひとをえらび給はすして、廣大無辺な慈悲の大海に攝めとられて、虚空の如き自在無碍の智慧力をもつて必ず救ひ逐けむとの御誓ひの御眞実心が、疑ひなく慮りなく我等の身に徹して参る、それがそのまま他力の大信心となるのである、恰も親心の眞実が子に滲透して始めて子心がひらけると同様である

平靜の時はまだよいが一端病氣とか災難に出遭ふと「溺れる者が藁をも掴む」やうに懸命にしがみついて、自分に都合のよい願を成就しようとする。然しそのことは遂に不可能となり、最もいみじらひ、一番怖れおののく暗黒の中に萬斛の恨みを抱いて転落するのがそのさだめである。

以上の三種の信仰に共通な点は、元來自己の力を土台とした信心であるから、自己そのものの動搖によつて信心も動転し、自己の萬策つきて力なくして終る時、信心も崩壊することである、次に共通な点は、自己が信ずる信心であるから、その信心の対象も自己が作り上げたものである。或哲學者の「神が人を作つたのではなく、人が神を作つた」いふ言葉も自力の信心の世界では適切にあてはまるのである、然も自己が有限であり、その有限の自己が作つたものも亦自己と同等若しくはそれ以下のものであるから、溺れる者が如何に藁を掴まへて見ても、そのまんま溺れ去つて行くといふことになのである。

他力の信心

他力の信心といふと眞宗獨特の様に考へてゐる人も多いが基督教にも「絶対受動」とか「我れ生くるに非ず、キリスト我に在りて生くるのみ」と云ふ有名な言葉もある。これ等も他力の信心に攝められるべきであるが、私の今述べようとするのは、聖徳太子と親鸞聖人によつて信証せられた絶対他力の信心である

他力とは他の力である。佛の本願力である。一切苦惱の衆生を救ひ遂けて成佛せしめずば佛とはならじとの御誓ひの力である。この佛力を根源として自然に顯現せられた信心を他力の信心と申すのである。佛の絶対力をもととしてゐるが故に我等の心の動搖によつて障へられず、遂には動搖して息まぬ心もおさめとられて安んじ靜められて参るのである。我等はもとより罪業の凡夫であるが、その罪業の一切を大海が萬川を容れて淨化する如く佛力に転惡成善せしめられて功德の潮に一味にせられるのである、我等は常に煩惱に覆はれた智慧の冥き身で無明の深夜を彷徨する身であるが、太陽一度東天に輝く時夜の暗は消えて山も河も野もさながらの姿が照し出される如く、無上淨信の曉において、我等の智を用なきものとして下されて佛智の照護の下におさめられるのである。かくて我等の智情意の三心が、そのまま虚仮として空ぜられて、佛智と佛慈に満ち足らはされるのである。ここに自力の信心を生活の唯一のよるべとしてゐたものが、そのまんま用なきものとなつて来ると共に、動搖ひまない自力の信が、ゆるぎなき他力金剛の大信心の世界に転入せしめられるのである

信心の生活

佛心の凡夫への徹到をさざみとして始めて信心の生活がひらける。今迄は佛はましませども無きも同様であつた、佛といふ言葉やその解釈は聞いてゐても画餅同様であつた。又心を励まし佛像を拜み聖教を誦誦し、念佛も申してゐても、自分

の心で創造した佛を拜み尊んでゐたにすぎない。唯々永遠の暗黒の世界で我執と我慢を根として右往左往とのた打ち廻る盲目的生活ばかりである。ところが不思議な御縁によつて、広大無辺な佛の大慈大悲心が滲み透つて、疑ふに疑へなくなり、身心共に佛の無碍の光明裡に攝め取られて參るのである。ここで一番よく注意せねばならぬことは、信の世界がひらけ始めて大きな慶びに触れると、鬼の首でも取つたかに得意になつて、もう自分は信心を獲た、矢でも鉄砲でも来い、この信心を未信の人々に伝へねばならぬといった風になり、自分の様になつたのが眞実の信心ではかは皆うそだといふ様な言動があらはれ勝である。これが信の慶びにひつかかつて、それを偶像視し、自分では一生懸命になつてゐる積りで實際は憚慢界に墮してゐる、佛法を宣伝してゐる積りで実は佛法の邪魔をしてゐるのである。そして信者と未信者を色分けして、自分と同じ經驗を持たない者は皆駄目といふ様な、油が水に浮いた状態、即ち独善の牢獄に閉ぢこめられる。

私自身廿四歳の秋、家庭問題に行き詰つて了うたのが御縁となつて念佛申させて頂くやうになつた。當時は恰も陽光一度地を潤はして百華爛熳と開き蝶舞ひ鳥歌ふといふ状態であつた。然し知らず知らず法悦とか法喜といふものにひつかかつて、憚慢界に墮しながら多少でも人々が感激し念佛して下さる姿を見て自分も喜ぶ、そしてその喜びを売り歩くことによつて自分の喜びを持続してゐた。又独善的な心は生命を捨てても自己の我執を貫ぬき通さうとする大危険にまで到つた。

私は淨土往生の大先達である韋提希夫人を憶ふ、我子阿闍世の逆惡により夫王ビンバシヤラは獄中に飢え、自らも亦宮殿深く幽閉せられた時、始めて佛陀の救済を仰いで廓然として大悟した。其後の韋提希は佛光の下に眞の母としての親心に覺め、己が身を懺悔しつつ默々として阿闍世に接したのである。遂に大懺悔の人と化した阿闍世の全身膿血が流れ惡臭満ちて誰も近よる人のない時、韋提希独り看護し藥をぬり頭を冷してゐる。この母の悲心は阿闍世をして佛を求めしめたのである。慈光ひとたび徹到するところ母は母としての本来の面目に歸らされ、その母としての久遠の理想を一步一步佛力に支へられて歩む、それが母としての韋提希の胸に宿る彌陀佛の月影である、西方への白道の旅である。

更に和国の教主としての聖德太子を仰ぐ。太子は暗黒の日本に誕生せられて佛道に深く帰依せられた。斯くて太子の暗黒の心を照し破つた佛の光明は、やがて太子の眼に、日本の本来あるべき姿が久遠の理想として浮び上つて來られた。それが太子の十七憲法である。當時の世相は渾り乱れてはてしない有様であつた。徒党相喰み、賄賂は横行し、同輩相嫉視し、百姓は用捨なく使役され、独断専行の弊害は甚しかつた。斯る暗黒の世に、上下の秩序整然とし四時運行するが如き久遠の大理想が掲げられたのである。ここに日本の国とその國民が帰すべき大道を昭々乎として照し出された。然も太子御自身は、常に「世間虚仮、唯佛是真」と仰せられつつ一步一步佛陀の無限の大悲をいただかれたのである。

た。信仰だ念佛だ、と申しつつ独善者のおちこむ怠慢と孤高の悲哀は身心が渴ききつたものとなり、身も心も悩亂した。私は長い年月かかる状態を繰返した。遂に近角先生を東都におたづねしたのは其苦悶の底であつた。それを機として再び暗黒の私に光が射し始めて參つた、氷が水にとかされ始めたのであつた。そして常恒不断の佛光は聞けば聞くほど我身の駄目さと空虚さを照りに照らして下さるやうになつた。

私共の暗黒の心に佛智の光が射して參ると、暗黒の世界の内容といふものがいよいよ明らかに知らされてくるのである。あれがいかぬ、これがいかぬといふやうな部分的な空しさではない、自己全体の虚仮さが照らされて浮び上る、そこに天地一切、内外共に一点の光もないことを信知せしめられて、その限々まで満ち充ち給ふ彌陀佛の慈懷に攝められる。ここに信仰と生活は最早渾然一体化されて分離することが出来なくなる。生活の全体が彌陀佛の慈光を蒙つて歩ませて頂くのである。我々が昼間平然と道を歩いてゐるが、そのまんま太陽の照光に護られてゐるやうなもので、彌陀佛の心光の照護なくしては生活の全体が皆悉く暗黒となるのである、信心をのけては生活が崩れて了ふ、生活がなくなつて了ふと申すことが出来る。

久遠の理想

白道の旅、それは釈迦彌陀二尊に照護せられての西方への旅である。淨土への一步一步である、然もそれは佛力に支へられた不退の一步一步である。

太子逝きまして千三百三十年、今日現に我等が辿るべき大理想として太子憲法は輝き渡つてゐる。ここに久遠の御姿があり、大理想の大理想たる所以がある。然しこの憲法を唯律法的修養的に実行しようとすれば必ず行き詰る、それは佛智に照らされ佛慈に護られて建現する、佛力自然の徳風である。

以上夫人と太子の上に鮮に見るやうに、我等の虚仮なる相を徹底的に照らし出して下さる佛智に折伏せられて、自然に浮び上るのが久遠の理想である。それは煩惱を土台とした理想の樓閣ではない、佛力によつて掲げ示される大理想である。それは実業、教育、政治、農業、等々の夫々の職場、即ち起きてから寝るまで汗を流し精力を傾けてゐる生活の上に、更に家庭の生活の上に、本来あるべき理想が明らかにされて參るのである。その大理想の鏡に照らされるから愈々我身の煩惱熾盛にして罪惡深重なる姿が写し出され、ただ佛の無限の大悲におさめとられて、大理想の道へひきもとされひきもとされて參るのである。

又この光明は健康人の上のみでなく、痼疾難病の者、不具者、死刑囚、老衰者、等々の障り多き者の上に、その障りにさへられ給はぬ光明が射し、その業報のままに衆禍波転の光益を蒙る。「どうしようもない」と泣き悲しむだ愚者榮得が地に大いなる光を掲げ、惡人の手本と言はれる耳四郎が我等がよき先達と転じて參るのである。

実に佛道は深く広く遙かである。老少善惡のあらゆる人々を攝め取り、そのままに転惡成善せしめて下さり、久遠の大理想実現の大道に導き入れ給ふのである。そこに各々そのとこ

ろを得しめられ、黄色黄光、白色白光の莊嚴世界を建現せしめて下さるのである。

昭和二十六年彼岸の日 稿了

聖親鸞を語る（續）

福島政雄

五、善鸞の問題

親鸞聖人が関東常陸の方に二十年もお住居になつて、それから六十越えてから京都にお歸りになつたといふことをだんだん申して参りました。そのお歸りになつた事情については前にも一つ二つこんな事ではなからうかと申しましたが、その外に考へられます事は次のやうな事もあります。

常陸の方においでになるその二十年間にはだんだんと聖人の教が人々の心に沁みこみましてお念佛申す御同行達がだんだんにふえてきたわけであります。それは大変いいことでありますけれども、だんだん御同行達がふえて来て、これはひとつ親鸞聖人を中心にした團體をつくらう、教團をつくらうかういふことになつて来たのではなからうか、そして教團の頭のやうにして聖人を戴くやうな傾向になつてきたのではありませんまいか。その時聖人が餘程お考へになつたのでありませう、成る程御同行が殖えてきたといふことは非常に有難い

ことであるけれども、これも教團組織といふものになつてくると、とかくさういふ團體組織といふものが今度は御信心徹底の妨になる、これはをかしなことでありますけれども聖人が五人なり七人なりの寄り合ひでお心持をだんだん深くお話しになれば本當に彌陀の誓願が聖人の御心を通じて人々にしんみりとひろまつていつた、徹していつた。所がその教團、即ち一つの團體組織になりますといふと、さういふわけにゆかぬ、ちやんと教團が出来ると教團の規則も出来ませうし、大勢集るのはいいけれども、その代りにどうしても以前のやうにお心は徹しないので、教團としてはだんだん大きくなつてくる。その結果はいいことにはなるまい、かういふ御心持が聖人におありになつたのではなからうかと思ふのであります、さうでありますからして関東の方でさういふ教團が出来ようといふことになつてくれば聖人を頭にいただかうといふふうになつてくると、これはいけない、本當の御信心といふもの

が徹らなくなる、さういふお心持が一つにはあつて一人で先づ京都にお歸りになつたのであらう、京都にお歸りになつて、その関東の御同行達との関係はどうなつたかと申しますと、人間といふものは眼の前にその人がをられると餘り何とも思つてゐないけれども、百里も百五十里もへだつてゆきますといふと、聖人にこの心持を伺ふはつであつた、御信心の上からかういふ問題はどうかであるうか、何でも大事なことから京都まで行つて聖人から直き直きのお話を伺はなくてはならぬ、かういふことになつてくる、非常に求道が眞劍になつてくるわけであります。

歎異抄の第二章にありますやうに「おのおの十餘箇国の境をこえて身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふ御ころざし」かういふことになつてくる。十何箇国、今の様に東海道線で一寸の間に行つてしまふと申すやうなことはありません。歩いて京都まで行く。その間には色々な泥棒やら追刺やらの危険も沢山あつたのでありませう。命がけで京都まで来てさうして御信心の上からかういふ問題はどうかでありませうといふやうにお尋ねすることになる、関東の御同行達の心持が非常に眞劍になつたのであります。尤も聖人はみんなを眞劍にならせるために京都に移るといふやうなお計らひがあつたのではないでありませうが、結果はさういふことになつてゐます。聖人はむしろ関東で教團の出来ることを避けるやうにして京都にお歸りになつたと思はれますが、結果としては関東の御同行達が非常な眞劍な対度になつて来たのであ

ります。

ところが京都にお歸りになりましたから関東の御同行達がそんなに眞劍になつたといふことは結構なことでありますけれども、ここに一つ困つたことが起つたといふのは聖人の生みの御子様である善鸞といふ方の問題であります。善鸞といふ方が関東に残つて居られて、御同行達に向つて、自分は親子の間であるといふ関係から父親から特別の法門をきいてゐる。それは自分が直き直きに父親から聞いたことであつて、これがまた父親鸞の本當の法門である、みんなに話されたのはまだまだ入口の浅いところであるといふやうなことを段々と言ひふらさされて、自分には祕密の伝授があると言はれたのであります。その祕密の伝授といふものがどんなことであつたかと申しますと、とてもない迷信がかつたものであつたやうであります。つまり祈禱をして護符といふものをこしらへてこれを病人に服用させると病氣がよくなるといふやうなことであつたのであります。これは非常な迷信的なことであつたのでありますけれども、関東の御同行の中には存外さういふ迷信的なことに迷はれる者が出来て来ましたやうであります。聖人様のお子様の言はれることだから、直々に特別伝授をお受けになつたといふのだから、その方が本當なのか知んといふやうなことで、どうも迷ふ人が出来てきたのであります。結局善鸞といふ方が関東の御同行達のまだ本當に徹してゐない人々の心をかき乱すといふやうなことになるのであります。

これが非常に困つた問題になつてきました。そこで聖人晩年のお手紙を見ますと、善鸞問題といふのがやかましいことになつてをります。善鸞といふ名ではなく慈信房といふ名で聖人の御消息の中に出てゐます。もつての外のことを言ひふらしてゐるさうだ、自分が特別に自分の子だから本当のところを別に伝へたといふやうなことは決してない。慈信房がふことに迷はされてはいけないといふやうな意味のお手紙が度々関東の方に行つてをるやうであります。そしてとうとうおしまひには慈信房善鸞を勘当なされるといふお手紙が行くといふことになつて、親子の縁を断つといふ悲痛なことになつてきたのであります。

それならばどうして善鸞といふ方がそんなふうになられたかと考へますと、そこには聖人の結婚生活といふことが問題になるのであります。前に申しましたやうな始めの京都時代に御一諸にをられた女性があつたのではなからうか。普通に善鸞は恵信尼の腹から生れたといふことになつてをりますけれども、さうでないかも知れないといふ想像が出来るのであります。京都時代に生れたのであつて恵信尼から言へば継子といふ関係である。善鸞の生みのお母様はどうなされたのかわかりませんが、恵信尼との関係は継母継子といふ関係である。さうなつて来ますと、そこに人間の悲しさ淺ましさとといふことがありまして、善鸞は継子であるといふ関係でありますと、何か心に充されぬものがある、たとひ恵信尼がどんなに立派な方であつたと致しまして、そこがやつぱり

もあらうお方が、どうして御自分のお子様を眞実の御信心に導くことが出来なかつたらうか、信心の人といふものがそんな無力なことではないだらうか、こんな難問なり抗議なりが持ち出されるとおもふのであります。これは親鸞聖人攻撃論になります。併しこんなことをいふのは自分の上を振りかへらずに人のことを批評するといふ輕薄な対度であらうとおもひます。私共めいめいの自分の家のことや自分の子供との関係のことをふり返つて見てもわかることではあります、自分の子供といふものがなかなか思ふやうになるものではありません、親の思ふ通りに素直に従つて来るといふ子供は、二十四孝の例などには出てゐますが、それは千人に二人か三人といふやうなもので大抵の家では子供といふものが決して親の思ふ通りにはなつてゐないものであります。現に私自身の場合でもさうであります。

親鸞上人はなるほど淨土眞宗の御開山であつて、徹底した淨土の御信心に生きておいでになつた方であります。そして私どもはその聖人の御蔭を蒙つて此の苦しみ的人生に生きさせて頂いてゐるのであります。聖人は人間としては御自分の宿業の深さといふことを徹底的に感じておいでになります、「そくばくの業を持ちける身にありけるを」歎異抄にも御述懐になつてゐます。御自分の業の深さを感じて、いかにも人間らしい御心持の上から御自分を愚禿だと仰言つてゐるのであります。この愚禿といふ言葉は涅槃經から出てゐるのであります、世の中が段々乱れて食ふことがむづかしくなつて

なさぬ仲でありまして、本當の生みの子のやうに心持を満足させることが出来ない、善鸞の方から言つても、どうも物足りないといふ心持で、生長するにつれて段々と心が荒んで來られた、すさんだ拳句に今のやうな全く間違つた迷信的なことを説かれるといふやうなことにもなつたのではなからうか、つまり継母継子の関係の冷い満されない心持といふものが善鸞を間違つた道に行かせるといふことになり、それが関東の御同行達の心持までかき乱すことになつてまゐりましたといふ想像が出来るのであります。

若し善鸞といふ方が恵信尼を母として生れたのであると致しますと、そこがわかりにくくなるのであります。そこではつきりした証拠があるのではありませんけれども恵信尼と善鸞とは継母継子という関係ではなかつたらうかといふ想像を致しますのであります。かやうに想像致して見ますと、それで親鸞聖人も晩年によほど苦んでおいでになるわであります。聖人は家庭的には実にお氣の毒だと申すより外はないのであります。幼少の時に早く両親に別れ、老年になつて善鸞問題といふやうなことで苦んでおいでになる、さうしてどんな事情かはつきりわからないけれども恵信尼とも、越後と京都とに別れ別れになられた生活、お子様方もあちらこちらに別れ別れになつてをられる、実にお氣の毒であります。

かやうに申しますと、ここに一つ抗議せられる方があらうと思ひます。成程さういふ事情でもあつたかも知れないが、それが事実であるならば困つたことである。親鸞聖人と

来ると、とても食つて行けないからお寺に入らうと思ひ立つ。自分は何も信仰があるのではないけれども、兎に角お寺に入り込みさへすれば食ふことだけは世話なしになる、それで食ふためにお寺に入らうといふ人間が現れて来る、これは甚怪しからん人間であります。世が乱れて来るとそんな人間が沢山に現れて来る、これを禿人といふと涅槃經の中に出てゐるのであります。親鸞上人は御自分のことを愚禿と言つておいでになる。聖人は涅槃經をよほど味つてお読みになつてをりますから、涅槃經の禿人といふのは自分のことだといふやうに感じてをられたに違ひない、それで御自身を愚禿といつておいでになる。自分は信心を戴いたからにはどんなことでも迷はない、どういふ人間でも感化して行くことが出来るなどとは仰せられないのであります。自分は禿人である、食ふためにお寺に入つてゐると言はれても辯解は出来ない人間であると感じてをられる、そこから人間界の業報の関係といふことを痛切に感じておいでになるのであります。

この業報とか宿業とかいふ感じは痛切な深い感じでありま。私共が考へてもなかなかわからない推察の出来ないことが此の人間の世界にはあちらにも、こちらにも一ぱいあります。道理からいへば、かうでなくてはならない筈であるけれども、さうなつてゐないといふことが此人生には実に多くあるものであります。これが私どもの世の中の有様であります。泣くにも泣けぬといふやうなことであります。そこから考へて見ますれば、聖人は偉い方であつたからその生みの御子の

善哉なんかを眞実の御信心に導いておいでになりさうなものであるといふのは、理窟でもつて聖人を批判しようといふことになるのであります。そんな理窟で聖人を批判する前に私どもは自分自身がどうなつてゐるかをまず振りかへつて見なければなりません。自分の子であるが決して自分の思ふ通りになつてゐるものではないといふことがわかつて参りますれば、私どもは聖人を冷く批判することなど出来なくなるわけでありまして。聖人の御言葉にも「取捨を加ふといへども、誹謗を生ずることなかれ」といふことがあります。取るべきを取り、捨つべきを捨ててくれよ、但しそしつてはくれるなといふのは、佛陀の御言葉に対する聖人の御心持でありませうが、私どもは聖人の御言葉に対してよく考へて行きたいと思ふのであります。

人間としての聖人には一面に悲しく淋しい御思ひがあつたに相違ないのであります。義絶の御文として伝へられてゐるものを見ますれば「いまは親といふことあるべからず、子とおもふこともおもひきりたり、三宝神明にまふしきりをばりぬかなしきことなり」とあります。まことに如何ほど御悲しきことであつたか推察申上げることが出来るのであります。私どもお互に自分の生活を振りかへつて見てもわかることでもあります。聖人の御晩年は人間としての情から言へば、さぞ淋しいお思ひをしてお暮しになつたであらうと思はれますのであります。聖人を責めるといふやうな心持は全く無くなるのであります。兎に角人間のことにはこんなことが非常に多いと

思ふのであります。併し聖人の御心持はたゞ淋しい悲しいといふことばかりではなかつたのであります。その苦しみの間にいよいよ御信心の御心持が深くなつて行つたのであります。さうしたことも申し述べたいのですが、今回はこれで終ります。

三界の衆生皆

吾が子なり

三界は安きことなし猶ほし火宅の如し衆苦充滿して甚だ怖畏すべし常に生老病死の憂患ありかくの如き等の火熾然として息まず如来はすでに三界の火宅を離れて寂然として閑居し林野に安処せり今この三界は皆これ我が有なり其の中の衆生は悉くこれ吾が子なりしかも今この処は諸々の患難多し唯我一人のみあつて能く救護を為す

法華經、譬喻品

念佛のたのもしさ

松 本 解 雄

念佛者は無碍の一道なり、そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪惡も業報を感じることあたはず、諸善も及ぶことなき故なりと、云云。

「信は力なり」といふことがいはれるが、この歎異抄第七章を拜読すると、私はこの上もない力強さを覚へる。この世に生をうけて四十余年、妻子をかかへ、一家をかまへどうにか世間並の生活をしてゐるやうだが、靜かに自分自身の眞姿を眺めてみれば、まことに頼りない、はかない存在である。最近軽い心臓の異変（医師の診断をうけたが別段心配はないとのこと）を覚えることがあるが、若しこの鼓動が一度停つたならば肉親とも別れ、描いてゐる夢の実現をも見ずしてこの世を去つてゆかなければならない。そして更に恐ろしいことは、日常の心生活に於ける数多くの罪障——といつても聖人の悲歎述懐に見られるやうな生々しい自覚は殆んどない、ただ都合の悪いときに自己弁護の道具に使つてゐるに過ぎないので、かくいふこと自体が何だか自己をいつはつてゐるやうだが——をつくりながら、それをそれとも知らずして果てて

しまはなければならぬことである。しかし、しかし仕合せなことには「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのこゝとみなもてそらごととたわごとまことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにて在します」の世界に住ませていただき、この世に於ける最も頼りない、はかない罪深い存在が、最も確かな如来の眞実の中に救済攝護されてゐるのである。

超世の悲願ききしより われらは生死の凡夫かは 有漏の穢身はかはらねど こころは淨土にあそぶなり

この大事実によつつかつて、自ら懺悔と感謝の中に日暮しをさして貰つてゐるが、ここに懺悔として最も強く感ぜしめられてゐるのは、これ程の身にあまる洪恩をうけながら、これに対して何等報謝のまことを捧げることの出来ないことである。

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報すべし 師主知識の恩徳も 骨をくだきても謝すべし

と仰せられてゐるが「粉骨碎身」を単なる形容詞として受取り、聖人の九十年の御苦勞を、「それは聖人だから」と片付けてすこしも自分自身を省みることなく、碌々としてその日暮しをしてゐる。あくまで横着な奴である。それにも拘らず「念佛者は無碍の一道なり」また「信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪惡も業報を感ずることあたはず、諸善も及ぶことなき故なり」と。何とした果報者であらうか。

京都時代、池山栄吉先生の御宅を訪ねる毎に、先づその御書齋にかかけられてゐる近角常觀先生筆の

爾れば大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風靜にして、衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に至つて、大般涅槃を証し、普賢の徳に遵ふなり

眞 實

故清水凡禿先生の隨想を拜読して、大いに反省させられて居ります、なかんづく骨董屋さんと語るといふ断片で感激させられました。即ち、「眞偽がどうしても判断がつかぬ時はまづその物を一生懸命に眺めて居て、さて一たん箱か何かに入れて置き、何日目かに取り出して見てなほ飽きが来なかつたら大低、眞物である」と、その人が申された云云。

「に触れさせて頂いて居る証拠であります。」

眞実、これは眞宗では最も大切な言葉となつてをります。親鸞聖人は一生涯かけて、眞実を開顯することを理想とせられました。畏れ多くも 明治大帝におかせられましたは、親鸞聖人に對し、特に大師号を諡らせ給ふに「見眞大師」と遊されましたことはまことに由深いことであります。

眞実は永遠不滅に物を引導し給うて居ります。聖徳太子が義疏の中に「經」の字を釈されて「經とは、法と訓じ、常と訓す。聖人の教は、また時移り、俗を易ふといへども、其是非を改むること能はざるが故に常と云ひ、また物の軌則となるが故に法と稱す」と申されてゐます。最も古くして常に新しい道こそ眞実の道であります。又それは古今に通じ中外にもとらぬ道であります。

御一代開書の中にも、佛の眞実に触れた方々の、汲めども汲めどもつくることのない、法味愛樂の御姿をうかがふこととであります。

法敬坊、九十まで存命さふらふ、「このとしまで聴聞まふしさふらへども、これまでと存知たることなし、あきたりもなきことなり」ともうされさふらふ。(四八)

金森の善從に或人申され候。「此間さこそ徒然に御候ひつらん」と申しければ、善從申され候「我身は八十になるまで徒然と云ふことを知らず。その故は、彌陀の御恩の有り難きほどを存じ、和讃聖教等を拜見申し候へば、心面白くもまた尊きこと充滿するゆへに、徒然なることも更になく候」と申され候由に候。(二九七)

「佛法に厭足なければ法の不思議をきく」といへり。云云。「佛法の事はいくたび聞くとあかぬ事なり。しりてもしりても存じたまき事なり。佛法の事は、いくたびもいくたびも人

の大幅にひきつけられたことを思ひ出すのであるが、我が心かほどまで醜く、忘恩背徳、眞に無慚無愧なるに拘らず「至徳の風靜に、衆禍の波転ず」と。これみなお念佛のなせるわざである。何とした慶びであらう。

無慚無愧のこの身にたまことの心はなけれども 彌陀の廻向の御名なれば 功德は十方にみちたまふ

「めぐまれて生くるいのちの尊さよ 名もなき草に光こほるる」まことに名も無い一本の雜草ではあるが、かぎりない光明にめぐまれて、一日一日を力強く生かされてゐるのである。池山先生御在世の時、度々お念佛のたのもしさについて御教化にあずかつたのであるが、この頼もしさに底知れない力強さを覚えるのである。

昭和二十六年九月三日、稿

出 淵 勝 郎

実を申せば私は幼少の時から物事に厭き易い性分であつて、永續きがしない。馬乗り、水泳、玉突等、さては歌舞、音曲俳句等何一つとして 仕遂けたものはない。又永續きが出来なかつた、中途で腰を折つてしまつた。然るに誠に不思議なのは、佛法だけは三十年以上も續けて聴聞してゐる。益々その深さ広さに驚かされて精進させて貰うてゐる。是は「眞実

にとひきはめ申すべき事なる」由仰せられ候。(二二四)

善財童子が色々の智識をたづねて、飽くこと倦むことなく求道されてゐる姿こそ尊くも有り難い御姿であります。眞実に触れ眞実にひかれ行く姿であります。

西元宗助著

凡人の求道

西元さんは鹿兒島生れで七(七)卒業、京大で教育学を修められたので、私と京都で同時代の知己であり善友であります。卒業後は鹿兒島師範から満洲の建国大学に転ぜられ、敗戦后ソ連に俘虜となり幸に帰還せられ、目下西京大学に教育学を講じて居られます。西元さんの帰国后度々の音信を頂き、その僅な文章の中に言いしれぬ親しさ温さを感じて二十年前の面影が一変してゐるのに驚き、また其頃福島先生にお遭い申してそのことを述べると先生は「満洲からソ連への生活ですつかり變つて来た。線の細さが太くなり、毒蛇とあだなされた西元君が、毒氣が抜かれて来た」とのことです。愈々訓練されるが多くなりました。本年七月末拙庵に御見舞を戴き二十一年振りの対面、念佛裡に一夜を明しました。そして彌陀佛の本願一つに打ちまかされた手放しの御信に自然に底光りのするものを感じ知申し、唯々「御井出度う」と申すばかりでありました。

今度自照舎から西元さんの著書「凡人の求道」が出ると聞き待ちきつて居りましたところ数日前お送り下され、一気呵勢に読了いたしました。大兄が四十年の血と肉を経とし脈々たる佛心を諱として織り成された尊い本であります。雪山童子の捨身鬘鬘の姿を地にあらわし、善財童子の開法の姿を現に見ることあります。大兄自ら「佛教に随つて眞理と道に志す現代青年学徒の諸兄姉に捧げたい」と誌してあるように、そうした方々の御講読を特にお勧め申します。

發行所

自照舎 京都市右京区山ノ内御堂町一五

振替 京都 木八四八番
定価 八拾円 送料拾円

編集後記

十月二十日、一道会館一周年記念講話会を福島先生をお迎へして催しました、午後の講話は「無碍の一道」で華嚴經入法界品の善財童子求道の物語を中心に永遠の求道魂を明かに説いて下さいました。佛陀の降魔成道といふことはこれで完成してすうたといふものでなく、眞実の光明に触れた佛陀が、いよいよ自己の空しさを自覚せられて、五十三の善知識を求めて行かれる、それが善財童子の姿である。その中には船頭も医師も小供も遊女も外道も皆合掌求道の童子の前に知識と転ずる、最后には嬰夷女（太子の妃）も佛母摩耶夫人も大切な知識となつて現はれ、遂に普賢菩薩に遭ひ彌陀の願海に帰し奉る。この善財の求道物語がそのまま「念佛者は無碍の一道なり」を信證せられたものであると知らされて、ともすれば懈慢界に墮する私を大いに鞭打つて頂きました。

夜間は法華經の序品を中心に一佛乗の法華經の精神を詳述して下さいました。特に序品といふものは、それ一つで全体が解るといふ大切さがある。たとへば友人の処へ用事を頼みに行く時でも最初の顔と顔が向き合ふだけ話をしなくても、これは駄目だとか大丈夫だといふことが直感出来る如くである。序品に於て經の全体が一目で見えるといふところがあると説かれた時は思はず身のしまる思ひがいたしました。

▽「聖親鸞を語る」の福島先生の前稿は聖人と善鸞大徳との關係について、聖人の心境を明らかにして下さいました。読者の方々も御自身の問題として考へて頂きたいと存じます

▽「念佛のたのもしさ」は松山農大の松本解雄さんに頂いた原稿であります。松本さんは京大の法学部を卒業后再び佛教学を専攻せられた方で私と同学部の善友であります。青森縣蟹田町の寺院出身の人で毎夏帰国せられて郷里の法縁を温めて居られますが、本稿も今夏の故山の講話と承ります。「惠まられて生きる生命の尊さよ、名もなき草に光こぼれる」という歌は京都の学生時代から念佛裡に常に愛詠せられたもので、今なほ私の耳に快く響いて来るものであります。

▽「眞実」の原稿は出淵勝郎翁が清水凡禿さんの隨想録に非常に感激せられて誌されたもので、出淵翁の息吹きをまざまざと感知出来る思ひがいたします。聖人が「誠なるかなや攝取不捨の眞言」と歎ぜられてゐるが、久遠の眞実に驚嘆せられた姿であります。

▽「信仰と生活」は數眞抄一章の「ただ信心を要とす」の一句に感じたままを述べました佛の慈悲において凡愚の身を攝め取つて頂き佛の知恵において虚仮の身を照し出して頂き、それがそのまま、帰命無量壽如来、南無不可思議光であります。南無阿彌陀佛であります。そこに南無阿彌陀佛のひとり働きがあらはれて下さるのであります。

禿人記

昭和二十六年十一月十日 印刷
昭和二十六年十一月十五日 発行
毎月一回十五日発行

定価 一部金拾五四（郵税共）
一年分金百八拾四（郵税共）

名古屋市南区匠上町二ノ二八

編集兼 花田正夫
発行人

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田政雄

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所 千草印刷所

名古屋市南区匠上町二ノ二八

一道会館

発行所 慈光社

振替口座番号 名古屋一〇四七〇番